

## 「日本語・日本事情部門」の概要と到達目標 —学部生に対する日本語・日本事情教育—

柴田幹夫（留学生センター）

### はじめに

学部留学生は、大学入学以前に日本語能力試験1、2級のレベルに達しているが、実際に大学で勉強を始めるとさまざまな困難が生じてくるのが現状である。これは、専門用語などの日本語能力に関する問題や大学の授業形態や勉強方法が留学生の出身国と異なっているなど、さまざまな要因があげられる。このような状況をふまえて、主に学部留学生を対象に、共通基礎の留学生基本科目として基礎日本語A、基礎日本語Bを、展開科目の日本語・日本事情科目群として応用日本語A、応用日本語B、日本事情人文系、日本事情社会系、日本事情自然系を開講している。また、これらの科目は留学生だけでなく海外帰国子女・中国帰国子女等も本人の希望や日本語力の判定により、所属学部の規則に従って履修することができる。なお、1999年4月期からは、クラス定員に余裕があり、学部学生と同等の日本語力を持ち、担当教官が受講を認められた者については、学部学生以外の者も許可している。これらの参加者には、大学院学生、大学院研究生、客員教員等が含まれるが、学部学生とは異なり、単位認定は行っていない。

### <日本語>

目 標：学部留学生が直面する困難のうち、講義、演習、図書館などの学習場面で大学の科目を勉強するために必要な日本語を学習する。

レベル：基礎日本語、応用日本語の2つのレベルを設置。原則として基礎日本語は学部の1年次に、応用日本語は学部の2年次に履修することを勧めている。

科 目：レベル毎にA、Bの2科目に分かれている。2科目の内容は、Aは「読解（日本語で書かれた文献を読むことができる）」と作文（レポ

ートや論文などを日本語で書くことができる）」で、Bは、「聴解・会話（日本語の講義を理解できる・教員や学生と円滑なコミュニケーションがとれる・ゼミなどで日本語で発表したり質問したりできる）」である。

成績評価：期末テスト・授業態度・提出物・出席状況など、総合的に評価している。

### <日本事情>

科 目：人文系・社会系・自然系の3科目を開講している。

▼人文系は日本人学生が「異文化コミュニケーション」の授業として参加する混合の授業である。討論形式の対話やロールプレイなどの体験学習をとおして、各学生の中に育まれてきた社会・文化を理解することからはじまり、異なる文化の存在に気づき、異なる文化に対する自己の対応や認識の変化など個人的で情動的な一連のプロセスを客観化することをねらいとしている。このような体験や客観化の作業の中から、異なる文化を背景に持つ人々同士の接触が引き起こしやすい誤解のありようを学生に理解させようというものである。よって、この人文系の日本事情は留学生のためだけではなく、日本人にとっても異文化理解教育の1つとして提供されている。

成績評価：レポート、発表態度、出席状況などを総合的に評価している。

▼社会系は、日本の法律・政治・経済についての講義を、各専門の教員がオムニバス形式で行っている。その具体的な内容は、  
法律：日常生活におけるもめ事に対する対応の必要性と方法

政治：日本の政治理解のために必要な見方など  
経済：日本経済史の通観  
等について講義が行われている。  
成績評価：筆記試験による。

▼自然系は、基礎分野では数学・物理・化学・生物・地学等の各分野の教員が、それぞれの見地から日本における自然科学の現状について解説する。また、応用分野では、医学・歯学・工学・農学の各分野について、専門の教員が日本における各分野の歴史・現状・考え方などについて解説している。  
成績評価：毎回の講義について担当教員が評点を与え、それを集計して科目の評価とする。

## 課題と将来展望

### 1. 日本語クラスについて

課題として2点ある。1点は授業内容についてであり、もう1点は学生に関することである。

まず、授業内容として、現在設定されている2科目をもっと大学の実情に合ったものに改良を加えるべきときに来ている。学部所属する留学生たちは日本人学生たちと対等に講義を受けたり、レポートを作成したりすることが要求される。よって日本語クラスも日本語表現技術を中心とした、より実務的な授業を実施することを計画している。例えば、「読解・文法」は「レポート・論文を読む」に、「表記・作文」は「レポート・論文を作成する」に、「聴解・会話」は「研究内容を発表する」に変更するなど、学生が研究活動で必要としている内容をめざす。また、将来的には、留学生だけに提供する日本語科目ではなく、大学生活に必要な「表現技術」として、日本人学生の教養科目としても拡張し、留学生、日本人学生という区別なく全学的な科目として開講していく予定である。

次の2点目の課題であるが、留学生の中にも日本語力の差があるので、単純に1年生、2年生というクラス分けができないのが現状である。このため、平成15年度には共通教育科目と留学生センター補講日本語クラスを留学生センター開講科目として一本化し、6つの日本語レベルのクラスを開講す

る。これにより、学生たちは細かく分けられた日本語クラスで学習でき、レベルがあがるにつれて、自分が必要とする日本語学習へとレベルアップしていくことが可能となり、よりシステマティックに学習を進めることが可能になる。

### 2. 日本事情クラスについて

日本語教育では、「日本事情」の内容についてまだ十分に議論されていない部分があるが、それでも、さまざまな大学で留学生教育を含む全学的な教養科目としての異文化理解教育として展開されつつある。大学も人文系の日本事情は日本人学生との合同クラスとなっており、数年前より新しい取り組みがなされてきている。現在、人文系の「日本事情」・「異文化コミュニケーション」と社会系の日本のいわゆる社会事情が分かれているが、大きな枠組みとして、現在の異文化コミュニケーションの授業を発展させていく必要がある。「異文化」という概念の中には当然、法律、政治、経済といった視野が含まれていしかるべきであり、異文化コミュニケーションの場で起こる実際の問題等を法律的に、あるいは政治的に、あるいは経済的にといった形でとらえていく必要があるだろう。そのためには、それぞれの分野の専門教員と異文化コミュニケーション担当の教員が共同でクラスの内容について設定し、運営していかなければならない。また、教員が理論等を教授するといった従来どおりの講義形式のものと留学生だけでなく全ての学生が参加する異文化理解に関連する体験学習形式のものとの組み合わせや、このような新しい教育の大学内での位置づけについても考えていかなければならない。

今後、日本事情科目全体の見直しと大学内での日本事情に対する共通理解を得るために、学部の留学生センター協力教員等と協力しあいながら、改善に努力していく予定である。

日本事情科目の見直しと少しは関連するが、2003年度開講から、日本人学生と留学生を対象とした講義科目が用意されている。「留学生と考えるシリーズ」として、「日本の宗教」と「日本の歴史」という科目が準備されている。留学生の日本観、日

本文化の理解度を日本人と共に考えていくことは、双方にとってプラスになるであろう。今後、留学生センターでは、このような科目を漸次増やしていく方向である。